

石川 卓磨 評
今井 俊介 “surface/volume”

Review by Takuma Ishikawa at ARTFORUM CHINA

<http://artforum.com.cn/picks/section=world#picks5081>

今井俊介は、インターネットからダウンロードしたポルノ画像や花の図柄を加工し、ウォールペインティングや絵画作品を作り出してきた。しかし、近年は純度の高い抽象絵画に取り組むようになってきている。今回のハギワラプロジェクトでの個展でも、原色や蛍光色、メタリックカラーなどで描かれた色鮮やかなストライプやドットの柄が複雑に重なり合って構成されている絵画作品を中心にしている。「surface / volume」という展覧会タイトルからも伝わるように、彼の作品は、鑑賞者に色彩と形体のやり取りだけを見ることを強いているようだ。

ではなぜ、今井はここまで徹底して、ポルノ画像の作品が持っていたような象徴的な要素を作品から排除したのだろうか。

今回展示された作品は、抽象的なイメージに傾倒しているとはいえ、明確な対象性を持っている。ストライプやドットの柄は、捻じれ、歪み、波打つ布や旗の襞のような表情を持っている。それは恣意的なものでも幾何学的整合性からでもなく、モチーフから引き出されているのは明らかだ。

また、影のない彩度の強い色彩と、合成的な重なり、図像の拡大や縮小を感じさせながらも元のサイズを知る手掛かりのなさ、画像をモニター上で操作する感覚と絵画制作とが分かちがたく結びついていることを示している。しかし、これは過去の作品からの展開の理由について何も説明したことにはならない。

今井のポルノ画像を使用した作品は、過激な性行為のイメージを用いているにもかかわらず、画像を2階調に加工し、花の図柄を迷彩のように重ねることで、生々しさは消去されている。そのため図像として理解できる猥褻なイメージが、性欲によって人を生理的に反応させる効果は、完全に無力化している。今井にとってポルノ画像は、サイケデリックな色彩のインスピレーションを与えるものとして貢献していたが、それ以上のものではなかった。これはヌードのイメージがプリントされているヌードTシャツと似ている。今や女性がヌードTシャツを着用することもそれほど珍しいことではない。ここでのヌードのイメージは、本物の裸や性欲とは無関係の一つのアイコンでしかない。彼はその記号内容の空転に反応していたわけだが、その空転それ自体を扱うためにヌードのイメージを排除し、直接的にキャンバス＝身体（つまりヌード）とイメージ＝衣服の関係を切り扱うことへと制作が展開したとはいえないだろうか。ここでの衣服とは、身体のフォルムや運動に、直接的な介入を与える服装のことである。無駄な装飾を排して、キャンバス＝身体の形態との関係に従事する服装のモードとしての衣服＝イメージは、キャンバス＝身体を隠蔽し、分割し、変形させるために存在する。一方で、イメージ＝衣服は、キャンバス＝身体の形態に従属するだけでない。イメージ＝衣服は、キャンバス＝身体のサイズや形体に注文を与えるのだ。

このイメージ＝衣服とキャンバス＝身体の対立は、その極北にフランク・ステラのシェイプド・キャンバスの仕事を置くことができる。しかし、今井にとってのキャンバス＝身体は、どこかマネキンのような無個性さを持っている。彼の作品において、色彩は充実し、空間は複雑な振幅を見せているが、キャンバスはその矩形とそのサイズを無個性な実体として露呈させている。イメージ＝衣服は、キャンバス＝身体からわずかに遊離し、裏側を持たない薄い皮膜と化しているのだ。